

第四章は、北朝と室町幕府の関係を、三章までの分析を前提として描いた部分であり、本書のクライマックスである。第一節では、まず光厳院政期、幕府側でいえば開幕し観応の擾乱の時期、幕府支配機構の不安定から、幕府が王朝政權の維持、存続を積極的に容認し、公家訴訟制度の整備がはかられたと述べる。後光厳親政期に至ると、西園寺実俊が鎌倉期の関東申次の後身たる「武家執奏」に就任したことで、公武の交渉窓口が確定し、幕府の王朝政權に対する口入も著しくなる。この傾向は、後円融親政前期、つまり細川頼之管領時代までは継続するが、斯波義将が管領に就任した康暦元年（一三七九）を境として再び大きく変化し、永徳年間（一三八一〜八四）を最後に「武家執奏」西園寺実俊の活動が消滅することに現れるように、王朝権力の主要部分は幕府に接収されたと論じている。第二節では、後円融院政期には実質上王朝接収を終えた義満政權が、「武家」伝奏万里小路嗣房を介して公家支配を行う状況を述べ、鎌倉幕府以来の東國政權の性格の払拭を達成した室町幕府の姿を描いている。

以上、概略を紹介したが、本書の最大の成果は、関係史料の博搜と綿密な考証により、王朝側を中心とした鎌倉末南北朝政治制度の基礎的な事実をかなりの水準まで明らかにした点である。本書の研究史の整理や史料の解釈、考証の過程を熟読し、一つずつ吟味していくことによって、新たな問題が発見され、中世国家史研究を前進させることができる。そんな秘かな自信をわれわれに与えてくれる一書である。

（A5版 五三七頁 一九八四年六月
文叢出版 一〇〇〇円）

（笑川圭 京都大学大学院生）

江口圭一編著

『資料 日中戦争期阿片政策』

日中戦争に関する著作は数多く出版されているが、その侵略の実態に関する基礎的な実証作業は、いまだに不十分な点が多く残されている。中国大陸を中心とした日本の阿片政策もその一つである。阿片は国際

条約および中国の国内法に規定された禁制品であり、極東国際軍事裁判でも、この問題が取り上げられた。しかし、日本の敗戦

の結果、阿片問題に関する資料は散佚したり意図的に隠滅され、この解明は日本側の一次資料の欠如により、きわめて不十分な状況であった。

江口氏は、一九四一年六月から四二年一〇月まで蒙古連合自治政府經濟部次長（満州国の場合と同様に事実上の長官）の職にあった沼野英不二が職務上所持していた文書を、東京の古書店の目録から偶然に知り、その中に蒙古連合自治政府（いわゆる蒙疆政權）の阿片政策に関する相当数の一次資料を発見し入手した。それに関連資料を加えて編集したものがこの資料集である。蒙疆政權は、日本の全中国占領地における阿片の主要供給者であり、この資料集は、一五年戦争下における日本の中国での阿片政策を示す一次資料を、まとまった形で初めて発見し出版するという意味でもきわめて意義深い。

資料集の構成は、第一部が江口氏の詳細な解説「日中戦争と阿片」（一〜一七一頁）、第二部が資料「阿片関係文書」（一七四〜六六二頁）となっている。解説は、解説というより蒙疆政權と阿片政策に関する長大な論文といったほうがよく、蒙疆政權や阿片

政策についての基礎知識をもたぬものでも、資料集が十分に理解できるように編集されていることが、資料集の大きな特色である。

この資料集で明らかにされた主なことは、第一に、一九三三年熱河作戦と同時に開始された内蒙工作は阿片と深く結びついて推進され、三七年に関東軍により樹立された蒙疆政権は「第二満州国化」された傀儡政権であり、阿片は政権の最重要財源の一つとして統制がはかられたこと、第二に、蒙疆政権の阿片政策は、一九三七・三八年の旧制を踏襲したことから、三九年に土薬公司を設立して土商を介さずに阿片売買を独占し統制管理の強化と阿片の増産を目指すものになるが、取納実績が不十分で、四〇年には公司を解散し、土商の利潤を認容して自らはそれに寄生して利益の上前をはねる間接的統制方式にかわり、一応の成功を得たこと、第三に、この結果、蒙疆政権は、一九三九年から四一年にかけて阿片収納を大幅に増加させるが、四二年には前年のわずか三五％という状況で、阿片の生産はまだいちじるしく不安定であったこと、第四に、蒙疆政権の阿片販売は、上海五五・四％、華北各地二四・三％と管外が九六・四

％で、管内での消費はごく一部であったこと等である。

残念ながら、この資料集には蒙疆から中国各地に配給された阿片が各地でどのように処理されたかを示す一次資料は含まれていない。しかし資料集の行間からは、日本は中国各地を占領後に阿片を禁圧しようとしたというより、蒙疆を阿片の供給源泉地としてむしろ積極的に阿片政策を組織的・系統的に展開したのであることが、一次資料の迫力で生々しく伝わってくる。

(A5版 六三五頁 一九八五年七月
岩波書店・七五〇〇円)

(伊藤之雄 京都大学研修員)

ゲオルク・G・イッガース著

中村幹雄・末川清
鈴木利章・谷口健治訳

『ヨーロッパ歴史学の新潮流』

本書は、欧米における近年の歴史学の動向を概観したものである。対象となっっているのは、フランス、西ドイツ、イギリス、アメリカの学界であり、さらにポーランドも視野におさめられている。本書の構成を

示しておこう。

第一章 伝統的歴史学の危機

第二章 フランスにおける『アナル』の伝統

第三章 歴史主義から「歴史的社会科学」へ

第四章 マルクス主義と近代社会史

第五章 最近のアメリカ社会史の傾向

附章 エピローグ

このうち、第四章の一部と第五章はそれぞれ他の筆者の寄稿であり、その意味では、本書は厳密には三人の共著ということになる。

欧米での最近の研究動向については、社会史への関心の高まりから、わが国でもとくにアナール学派を筆頭にすでに多くの紹介がある。しかし、そうした動向紹介は個別に行われるのが常で、全体を俯瞰する視角に乏しかった。右の構成にも見られるように、これほど広範囲の対象を一望のもとにおさめたことが、本書の長所としてまず挙げられる。

だが、だからといって本書は、各国の研究者の動静に細大もろさず目配りした、単なる研究動向ハンドブックなのでは決して